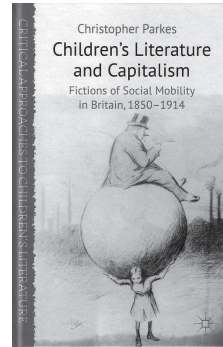


書評

Christopher Parkes, *Children's Literature and Capitalism: Fictions of Social Mobility in Britain, 1850–1914* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2012)

川端 有子



この本を読んで、十数年前、某女子大での非常勤のクラスで、E. ネズビットの『宝さがし子どもたち』(*The Story of the Treasure Seekers*, 1899)を取り上げて、読んだことを鮮明に思い出した。「由緒ある」ということになっているバスタブル家の失われた財産を回復すべく、一家の子どもたち六人が、さまざまな金儲け(宝さがしから追いはぎ、インチキ菓の販売、高利貸しからの借金、新聞社に自作の詩を売るといった多様な「商売」)にトライし、まあ予測できることだが、すべてにおいて失敗をしでかす。その可笑しさとともに、実はその失敗をもたらした子どもたちの世間的無知／無邪気さが、却って幸いし、父親がビジネスパートナーを獲得してハッピーエンドを迎えるという物語なのであるが、その授業のなかで、いまだに強く心に残っていることがある。

ひとりの学生が、この物語を非常に嫌い、「子どもがこんなにお金もうけのことばかり考えているなんて、いやらしくていや!」と叫び、強い拒否反応を起こしたのである。私は驚き、その場は「でも考えてみて、これはみんな本当に金儲けしてるんじゃないかと」「ごっこ」遊びしているだけじゃない」と応じたのだが、つくづく、ひとが「児童文学」や「子ども像」に期待している「イノセンス」というものについて考えさせられた。いまだに、「児童文学」には汚い世知の世界やどろどろした愛欲などは決して登場しない、という先入観は根強いし、またその研究自体も、歴史や経済や政治とは関係しないという一般的な見解は、文学研究者の間にすら(!)見られる。いまだに社会の主流をしめる考え方では、「子ども像」というのは、ロマン主義的な「経済的には役に立たないが、情緒的にはお金

では測りがたい」存在であり続けているらしい。

一体、児童文学と資本主義、どこに接点があるのか、しかも十九世紀末から二十世紀の初めの、まさに児童文学の黄金時代といわれた時代において?と考える人がいても不思議はない。そんな方にはこの本をぜひ一読することをお勧めしたい。私自身にとっては、十数年前に読んでいたら(2012年に出た本なので実際的には無理なのだが)、もっとまじな答えができたかもしれない自分への反省もあり、またあのときの自分の答えが直感的に、さして的外れでなかったという嬉しい発見もあった。

いささか前置きが長くなったが、この本が主に取り扱っている作品は、ディケンズの『デヴィッド・コッパーフィールド』(*David Copperfield*, 1850)、『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1861)、スティーヴンソンの『宝島』(*The Treasure Island*, 1883)と『誘拐されて』(*Kidnapped*, 1886)、ネズビットの『宝さがしの子どもたち』、『鉄道きょうだい』(*The Railway Children*, 1906)、バーネットの『小公女』(*A Little Princess*, 1905)、『秘密の花園』(*The Secret Garden*, 1911)、そしてモンゴメリの『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908)と『アンの夢の家』(*Anne's House of Dreams*, 1917)である。いずれもよく知られた作品ながら、こうして並べてみると、いったいどういう視点で、どういう議論が展開されるのか、首をかしげるようなチョイスであることは確かだ。

しかし、著者の見解では、これらの作品はすべて、資本主義の無垢の犠牲者であるとされてきた「子ども像」を、資本主義社会に理想的な形で関与する存在として変貌させた、という点において共通性を持つという。端的に言えば、先に述べた、情緒的にしか価値がなかったロマン主義的な子ども像が、ヴィクトリア朝後期からエドワード朝にかけて、資本主義社会と密接な繋がりを有するようになり、同時に資本主義の実態を隠蔽し、いかにもイノセントなものに見せかけるための装置と変化した、というのが著者の主張である。

経済活動への参加は、子どもたちのイノセンスを汚すどころか、子どもたちが生まれながらに持つ可愛い「好奇心」、子どもたちにとりわけ推奨された創意工夫に富む「遊び」の能力、おとなびてはいるが無邪気な「空想」を解き放ち、資本主義社会における階級的越境(昔風に言うと立身出

世)を可能にした、というわけで、「子ども像」と資本主義の関係を再定義しようというのが、本書の試みである。

サミュエル・スマイルズの「セルフ・ヘルプ」運動が広まるにつれ、十九世紀半ばから、子どもの遊び場こそ創意工夫にあふれるビジネスのオが育まれるところである、そしてその子ども時代こそ、貧困を免れ、階級間格差を乗り越えてゆくツールを獲得し、鍛えてゆくことができる場なのだ、という思想が生まれる。これは伝統的に、子どもや若い人向けの読み物が、社会のヒエラルキーのなかで足を踏み外さず、決められた場所で満足して生きよ、と教えてきたこととは真っ向から反するものであったが、中には次第によりよい生を求めて努力する主人公を応援するような立場をとる作者も現れてきた。

ディケンズの『デヴィッド・コッパーフィールド』、『大いなる遺産』の二作品は、ヴィクトリア朝のファミリービジネス産業を理想的なものとしながらも、そこにどうしても付きまとう搾取や革新性の欠如を批判していると論じられる。どちらも階級の上昇とプロフェッショナルなキャリアを求めて、生まれ育った子ども時代を捨てる主人公の物語だ。

スティーヴンソンの『宝島』と『誘拐されて』について、著者はモダン・プロフェッショナルの育成の基礎になったものとして見ている。確かに『宝島』のジムは公務員、『誘拐されて』のデイヴィッドは弁護士になろうと努力している少年である。前者の海賊たちとの冒険、後者のスコットランド高地人の反乱事件への関与は、彼らが力のある社会的主体となるために必要な冒険心と、ロマンスを提供してくれているというわけである。

ディケンズやスティーヴンソンの小説が児童文学と見なせるかどうかについては意見が分かれるところかもしれないが、ネズビットとバーネットが児童文学の作家であることに異を唱える人はないだろう(もっとも二人とも同時代にはおとな向けの小説家でもあったが)。本書の筆がさえるのもやはりこの後の展開である。

先に述べたとおり、『宝さがしの子どもたち』は、高利貸しやインチキ薬販売までを「無邪気な遊び」に変貌させ、愛読するディケンズやスティーヴンソン、キプリング、エッジワースなどの小説を、実演して「遊

ぶ」ことによって、実は、おとなたちの資本主義経済や植民地主義すらも、楽しくイノセントな「遊び」に見せかけるということに加担している。バスタブル家の子どもたちは零落したアッパーミドルの家族だ。母は死んでおり、父は事業に失敗し、学校に行くお金もないというので、日がな一日空想のごっこ遊びを楽しんでいる。だが、たまたま彼らの空想ごっこに参加することになってしまったあるおとなに、そのごっこ遊びの創意性、創造性を認められ、こんな子どもたちの父親ならばさぞかし創意工夫に富んでいるだろうということで、バスタブル氏は資本主義社会の成功者——インドから帰ってきたばかりのコロニアリスト——に迎え入れられるのだ。

『鉄道きょうだい』においては、鉄道産業はイギリスの無垢の田園風景を損なう傷ではなく、子どもたちの遊び場から生まれた空想力にあふれるプロジェクトの延長となる。父は無実の罪で投獄された公務員で、一家は人里離れた村に住み、母親が文筆業で家計を支えることになり、一時的に階級的墜落を経験する。この境遇は、しかし、三人のきょうだいにとって「貧乏ごっこ」の時期であり、子どもたちのごっこ遊びが、やがて鉄道事故を防ぐという重要な事件につながってから、やはりこの子どもにして父親に罪があるはずがない、という展開で、冤罪を晴らした父の帰還が結末を飾る。

一方、バーネットの二作品では「教育」が焦点となる。『小公女』においては、貧しい境遇に陥った主人公が、逆境にもまげず自分が王女様であるという空想を保ち続け、独学を続けることで、父の旧友に救われるという物語である。だが著者は、独学ができて、どんなときにも王女様である「ごっこ遊び」は所詮、もと「王女様」扱いされてきたアッパーミドルのセーラにしかできないことであり、想像力こそ階級を超えるための最大の手段と謳いつつ、その能力を持つのは中流階級の白人でしかない、という二律背反性を見抜いている。『秘密の花園』では「自然」こそが子どもにとっての一番の教師であるというロマンティックな思想を掲げつつ、庭という自然が子どもたちに教えるのは、そもそも自然に属している女の子メアリアは母親に、自然児ディッコンは農夫に、というキャリアだ。しかし自然から切り離されている地主階級の跡継ぎコリンには、自然を客観的に観

察し、分析する自然科学者、発明家への道が用意されている、という。

カナダの『赤毛のアン』が最後に登場するのは、いささか牽強附会という感も否めないが、孤児という社会の最低の位置から、そのライフストーリーを語ることによって自らに情緒的価値を付し、リスペクタブルな家庭にふさわしい存在へとの上あがっていくヒロインのアンに、著者はとりわけ先駆性を見ている。教育という点から見ても、ギルバートというライバルと互角に肩を並べ、教師というキャリアを得るアン。一方、ギルバートのほうは自己犠牲と病気の父への献身の念から医師というキャリアを運命づけられているという点で、ジェンダーの逆転も見られる。しかしながら、ライフストーリーを出版する、つまり商品化することで経済的価値を得るには、やはり男性作家の手を借りねばならないという限界、結婚して子どもを得、さらにその子どもを翌日失って初めて、アンの子女性としてのライフストーリーが完成するという点で、いまだ時代的限界を抜け切れていないことが示されるのが『アンと夢の家』ということになる。

ともあれ、ヴィクトリア朝後半からエドワード朝が、児童文学の「黄金期」であったということ、資本主義の発展という観点から再定義を行ったという点で、児童文学の研究者としても、ヴィクトリア朝の研究者としても、新たな観点を得ることのできた著書であった。